

## 高麗仏教の図讖信仰

## 受容について

梁 銀 容

『朝鮮寺刹史料』巻下に「高麗國師道誥伝」（以下「道誥伝」と略称する）なるものが伝わる。新羅末期の禪僧道誥（八二七—八九八）の入唐求讖や禪補寺院建立に関する記録である。五八〇字の小伝ながらも、「高麗沙門宏演撰」と、その撰者が僧侶であったことに注目される。本稿では、この「道誥伝」をめぐって高麗仏教と図讖信仰との関わり的一端を考えて見たい。

道誥は高麗太祖王建の誕生や統一国家建設を予言したといわれる。王建は、讖文を符命と掲げ建国革命を起し、ついに全国を統一するが、それを「仏力」の加護によったものと見なす。それから信書の「訓要十条」をあらわし、

「其二曰。諸寺院。皆道誥推占山水順逆而開創。道誥云。吾所占定外。妄加創造。則損薄地德。祚業不永。（中略）新羅之末。競造浮屠。衰損地德。以底於亡。可不戒哉」

と述べた。この道誥説に基づいた王建の寺院経営政策は、図讖表現の一つである風水法によっている。これをとくに禪補寺塔説という。山川形局を見て地徳の衰処・逆処を捉び、そこに寺院や仏像・堂塔を建てることによつて地徳を禪補し、王業延基を図るといふ原理である。

王建以来、高麗朝廷では道誥を絶対的な存在として奉り、王朝創業の功徳を讀え大禪師・王師・國師の尊号を次々と追贈する。その功徳が図讖原理であったところから、禪僧道誥はたちまち図讖の鼻祖と呼ばれるようになった。

こうした思潮は、高麗社会における讖書の流布を意味するものである。新羅末期の乱れた社会状況から流行つた図讖は、高麗に至つて仏教とともに王室に受容されてから、強い信仰的性格をもつて社会に根をおろす。それは独立した組織や儀礼を形成するよりも、未細織状態ではばばらに發展し、諸信仰習俗の地盤になる。

図讖信仰は、王業の盛衰を予言し人間の未来を占うために、つねに現世利盛の性格をもつ。高麗王室の道誥崇拜は言うまでもなく、王室の庇護下で栄えた仏教の祈福化は、この図讖信仰原理と関わる現世利益的展開といえる。

高麗社会には全時代を通じてかずかずの讖書が流行した。朝廷ではそれらを集め『海東秘録』を編纂するが、その大部分が道誥撰と名乗るものである。この道誥讖記を利用した僧侶は、妙清・遍照など数多く挙げられるが、本人の書いた記録はほとんど伝わらない。

宏演撰の「道誥伝」は、こうした意味から、仏教側の立場を窺う上で非常に重要視される。彼は現存記録から、高麗末期の奈翁慧勳（一三三〇—一三七六）の法嗣とわかる。慧勳は印度僧悟空から法を受け、恭愍王の王師になった高僧で、その門下に朝鮮太祖の王師無学自超（一三二七—一四〇五）ら数多い大徳を輩出した。宏演はこの禪門で詩をもつて名をあげた人物である。

「道誥伝」は内容から見て、『高麗史』高麗世系所収の道誥讖説を裏付ける。世系所収の説は高麗歴代の道誥に対する正統的解釈に

なっているが、宏演は、それをもつと原理的に提示する。

それによると、道説の諸説は、唐僧一行禪師（六八三—七二七）の教示による。一行は道説より一五〇年の先代の人物であったから、彼らを師弟と見るのは無現であり、道説の入唐も考えられないものの、当時は疑いもない事実として信じられた。

そして、裨補原理を、

「一行謂道説曰。我（一行）於高麗有緣。聞高麗山川。多背逆本主。故作九韓。內逆賊外逆賊。綿綿不絶。此天地血脉。不調之病也。麗民多死疾病・飢饉・刀兵者以此也。」

「（一）行扣筆。向三韓山水圖中。挾三三八百区。件件落点曰。人若有病急。即尋血脉。或針或灸則即病愈。山川之病亦然。今我落点处。或建寺立仏立塔立浮圖。則如人之鍼灸。名曰裨補也。」と述べる。「訓要」同様の説が、人体に例えられ、それも一行によって打ちだされる形である。また、王建誕生なども一行の予言といわれる。

同伝には、「道」説建裨補五百刹也」と、道説は一行から伝受した裨補原理に基づいて、五百寺院を建立したとある。さらに、裨補信仰を強調し、「不信裨補破仏刹。則国破民死。亦必矣」と述べる。国泰安民の現世利益に関わった護教思想がよく窺える。

高麗王室では、裨補寺院と新羅以前の建立および私建など其他寺院とを、区別して考えた。給田の思沢は裨補寺院に限る。神宗六年（一一九八）には山川裨補都監を設置し、王業延基を図った。こうした高麗王室の裨補事業を考慮すると、「道説伝」の思想は、当時思潮を受け継いだものとわかる。

仏教側でもそれは同様にいえる。すなわち宏演周囲の禪師らが讖

高麗仏教の図讖信仰受容について（梁）

書を用いている。太古国師普愚（一一三〇—一一三八）は、「僧普愚。以讖説王曰。都漢陽則三十六国朝。王（恭愍）惑其説。大築漢陽宮闕。」

と、讖説を引き南京遷都を勧めた。また、宏演の同門の自超は、風水説に深い造詣をもち、朝鮮の王都挾地など建国事業に大きな役割をはたす。そして、朝鮮太祖時の彼は、高麗太祖時の道説によく對比される。

換言すれば、仏教本来の教義とは異なる図讖信仰も、当時思潮からは護国護法の一方便と見なされたと思われる。道説前後から地方豪族と関わりをもつて明堂を拵んで寺院を築いた禪宗において、格外の道理が図讖原理と合い通じたところがあつたのかも知れない。いずれにしても、高麗時代の図讖信仰は、とくに禪門でよく流行したが、「道説伝」もそうした流れを踏まえたものと考えられる。

現存の寺誌・事蹟・重建記などには、前記「道説伝」で見えるような裨補原理を収めているのが非常に多い。それはまた、一地域に限らず、ほぼ全国の寺院縁起に関わっている。このように見てくると、高麗仏教の図讖信仰の受容は一時的方便よりも、仏教信仰の底流に染み込んだ現世利益の原理と見える。

- 1 『高麗史節要』卷之一、太祖神聖大王二十六年条。
- 2 拙稿、「高麗史所引の道説讖記について」（『印度学仏教学研究』二一九—二二一頁）。
- 3 『備齋叢話』卷之八。
- 4 『高麗史』志卷第三十一、百官二。
- 5 同、列伝卷第十九、尹沢伝。
- 6 『朝鮮金石総覧』・『朝鮮寺刹史料』など。「道説」と名乗る寺院の散在も同様。

（仏教文化研究所）